(19)日本国特許庁(JP)　(12)特　許　公　報(B2)　(11)特許番号

特許第3704464号
(P3704464)

(45)発行日　平成17年10月12日(2005.10.12)　(24)登録日　平成17年7月29日(2005.7.29)

(51)Int.Cl.[7]	F I		
A61K 7/00	A61K	7/00	B
A61K 7/021	A61K	7/00	J
A61K 7/025	A61K	7/00	V
A61K 7/032	A61K	7/021	
	A61K	7/025	

請求項の数 6　(全 14 頁)　最終頁に続く

(21)出願番号　特願2000-331369(P2000-331369)
(22)出願日　平成12年10月30日(2000.10.30)
(65)公開番号　特開2002-138009(P2002-138009A)
(43)公開日　平成14年5月14日(2002.5.14)
審査請求日　平成15年1月15日(2003.1.15)

前置審査

(73)特許権者　000145862
株式会社コーセー
東京都中央区日本橋３丁目６番２号
(74)代理人　100086324
弁理士　小野　信夫
(72)発明者　奥山　雅樹
東京都北区栄町４８番１８号　株式会社コーセー研究本部内
(72)発明者　津原　一寛
東京都北区栄町４８番１８号　株式会社コーセー研究本部内
(72)発明者　小杉　昌輝
東京都北区栄町４８番１８号　株式会社コーセー研究本部内

最終頁に続く

(54)【発明の名称】油性化粧料

(57)【特許請求の範囲】

【請求項１】

次の成分（ａ）および（ｂ）

（ａ）ガラスフレークの表面を金属酸化物で被覆した、平均厚さが０．１～３．０μｍ、平均粒径が１～７００μｍ、アスペクト比が５～５００である真珠光沢顔料

（ｂ）ロジン酸系樹脂、トリメチルシロキシケイ酸、アクリル変性シリコーン、酢酸ビニル系樹脂、ポリビニルイソブチルエーテル、ポリイソブチレンから選ばれる油溶性樹脂成分の１種または２種以上

を含有することを特徴とする油性化粧料。

【請求項２】

成分（ａ）のガラスフレークがシリカ（SiO_2）を４５～７５質量％含有するものである請求項第１項記載の油性化粧料。

【請求項３】

成分（ａ）の金属酸化物がチタニア（TiO_2）、ジルコニア（ZrO_2）または酸化鉄から選ばれる１種または２種以上である請求項第１項又は第２項記載の油性化粧料。

【請求項４】

成分（ａ）の含有量が０．１～５０質量％であり、成分（ｂ）の含有量が０．１～３０質量％である請求項第１項乃至第３項のいずれかに記載の油性化粧料。

【請求項５】

成分（ｂ）の油溶性樹脂成分が、ロジン酸系樹脂及び／またはポリイソブチレンである

ことを特徴とする請求項第１項乃至第４項のいずれかに記載の油性化粧料。
【請求項６】
油性化粧料の形状が、口紅、マスカラ、アイシャドウ、アイカラー、アイライナー、ほほ紅またはファンデーションである請求項第１項乃至第５項のいずれかの項記載の油性化粧料。
【発明の詳細な説明】
【０００１】
【発明の属する技術分野】
本発明は、油性化粧料に関し、更に詳細には、使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌を演出するという化粧効果を有すると共にその持続性に優れ、また使用性が良く、安全性、安定性も良好な油性化粧料に関する。
【０００２】
【従来の技術】
従来、油性化粧料は、化粧効果の持続性に優れた特徴をもつものとして使用されており、その製品剤型は使用部位によって多岐にわたるが、代表的なものとして口紅、マスカラ、アイシャドウ、アイカラー、アイライナー、ほほ紅、ファンデーションといったものが挙げられる。
【０００３】
一般的にこれらの油性化粧料は、固形状油分、例えばワックスやロウ類、粉体及び皮膜形成剤を中心として構成されている。そして、化粧品としての快適な使用性、使用感及び機能性を持たせるために、ワックス類、粉体、皮膜形成剤として種々の性状、性質をもつものが選択されており、それらの配合検討も行われてきた。さらに、使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌をつくりだすために、パール剤やラメ剤といった光輝性顔料の配合検討もなされてきた。
【０００４】
【発明が解決しようとする課題】
しかしながら、これらの油性化粧料において、パール剤を配合することで使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌を演出することはできるものの、十分な化粧効果を得るためには多量に配合する必要があった。そして、パール剤を多量に配合した場合は、化粧料の安定性や化粧膜の持続性が低下し、油性化粧料として満足のいくものが得られないという問題があった。
【０００５】
また、ラメ剤を配合することにより、使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌を演出するといった化粧効果は得られるものの、ラメ剤自身の付着性が弱いために時間の経過と共に剥離する傾向があり、化粧効果の持続といった点で満足のいくものが得られなかった。
【０００６】
【課題を解決するための手段】
そこで本発明者らは、上記課題を解決するため鋭意研究を行った結果、光輝性顔料として、ガラスフレークの表面を金属酸化物で被覆した一定形状の真珠光沢顔料を用い、これを油溶性樹脂成分と組み合わせることにより、使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌を演出するといった化粧効果に優れ、その化粧効果の持続性が高く、良好な使用性、使用感及び均一な化粧膜を付与する油性化粧料が得られることを見出し、本発明を完成するに至った。
【０００７】
すなわち本発明は、次の成分（ａ）および（ｂ）
（ａ）ガラスフレークの表面を金属酸化物で被覆して得られ、平均厚さが０．１～３．０μｍ、平均粒径が１～７００μｍ、アスペクト比が５～５００である真珠光沢顔料
（ｂ）油溶性樹脂成分
を含有することを特徴とする油性化粧料を提供するものである。
【０００８】

【発明の実施の形態】
本発明に使用される成分（ａ）の真珠光沢顔料は、ガラスフレークを母材とし、その表面を金属酸化物で被覆したものである。ここでいうガラスフレークとは、シリカ（SiO_2）を４５～７５質量％（以下、単に「％」で示す）程度含有するガラスフィルムを粉砕することにより得られるのもである。このガラスフレークとしては、例えば、溶融法で製造されるものが挙げられ、より具体的には、特公昭４１－１７１４８号公報、特公昭４５－３５４１号公報に記載の方法で製造したものを例示することができる。
【０００９】
上記の方法で得られるガラスフレークは、自由表面を持つ溶融ガラスを冷却固化するため、その表面は非常に平滑であり、さらに非晶質でへき開性を有しないので、その表面にはほとんど段差を生じない。また、シリカが８０％以上含有されるシリカガラスに比べ、若干の柔軟性を有するため、破砕され難く、化粧料への配合に適している。
【００１０】
また、形状的には、平均厚さ０．１～３．０μｍのガラスフィルムを粉砕後分級し、平均粒径１～７００μｍ、平均厚さ０．１～３．０μｍ、アスペクト比５～５００のガラスフレークを得ることができる。
【００１１】
ガラスフレークの原料となるガラスとしては、シリカを上記した範囲で含有し、溶融成型できるものならどのような組成でも良く、ソーダライムガラス、Ｓガラス、Ｅガラス、Ｃガラスなどが例示されるが、表面に段差を生じにくく、かつ平滑性を得やすい点で、特にＣガラスがより好ましい。
【００１２】
本発明に使用される成分（ａ）の真珠光沢顔料は、ガラスフレークの表面を金属酸化物で被覆した後の状態で、平均厚さが０．１～３．０μｍ、平均粒径が１～７００μｍ、アスペクト比が５～５００であるものである。平均厚さについては、ガラスフレークは製造技術上０．１μｍより薄くすることは困難であり、またその一方で３．０μｍより厚い場合、ざらつき感を生じ、感触的に好ましくない。
【００１３】
また、平均粒子径が１μｍ未満の場合は、充分な光輝性が得られず、一方７００μｍより大きい場合は、ざらざら感が強くなり、光沢も強すぎて不自然になってしまい、これもまた不適である。
【００１４】
さらに、そのアスペクト比が５より小さい場合は、その肌上でののび感が悪くなり、一方５００より大きい場合は、肌へのフィット感が悪く、かつ、その金属被覆物の外観も光沢が強すぎて、本発明としては好ましくない。なお、「アスペクト比」とは、ガラスフレークの平均粒径を平均厚さで除した値を指すものである。
【００１５】
このガラスフレークを金属酸化物で被覆することにより、外観上真珠に似た光沢を示す真珠光沢顔料を得ることができるが、この被覆に用いられる金属酸化物としては、チタニア（TiO_2）、ジルコニア（ZrO_2）、酸化鉄などの金属酸化物が挙げられる。金属酸化物による被膜の形成方法は、公知の技術を利用すればよく、例えば、特公昭４３－２５６４４号公報、特開昭４７－３４５２９号公報に記載されている方法等を利用することができ、具体的には硫酸チタニル溶液または四塩化チタン溶液にガラスフレークを懸濁させ、かかる溶液を昇温することによりチタニアを析出させ、ガラスフレーク上に被膜を設けることができる。ただし、この方法に限定するものではなく、ガラスフレーク上に薄く被膜を設けることができる方法であれば、特に制限はされない。
【００１６】
なお、本発明に使用される成分（ａ）の真珠光沢顔料においては、ガラスフレーク上の被膜の厚さを制御することにより、干渉による任意の色調を発現させることが出来る。この被膜の厚さは、２０～２５０ｎｍが好ましい。厚さが２０ｎｍ未満では光輝性が発現し難

く、一方２５０ｎｍより厚い場合には、適度な透明感を有する光輝的な外観が得られない場合がある。なお、被膜はかかる微小な厚さであるため、ガラスフレークと真珠光沢顔料の厚さは大差ないものである。また、成分（ａ）は、必要に応じて、一般油剤、シリコーン系化合物、フッ素系化合物、界面活性剤等で表面処理してから使用することもできる。

【００１７】

一方、本発明に使用される成分（ｂ）である油溶性樹脂成分としては、特に制限されず、通常化粧料に配合されるものであればいずれのものも使用できる。具体的な成分（ｂ）の例としては、ロジン酸系樹脂、トリメチルシロキシケイ酸、アクリル変性シリコーン、酢酸ビニル系樹脂、ポリビニルイソブチルエーテル、ポリイソブチレン等が挙げられるが、中でも、ロジン酸系樹脂、ポリイソブチレンが化粧効果の持続性といった点で好ましい。これらの樹脂成分は必要に応じて、１種または２種以上を用いることができる。

【００１８】

本発明の油性化粧料は、上記成分（ａ）と成分（ｂ）を常法に従って混合することにより製造することができる。本発明油性化粧料における成分（ａ）の配合量は、使用性、使用感及び剤型により異なり、特に制限されないが、全組成物中、０．１～５０％が好ましく、１～２０％がより好ましい。また、成分（ｂ）の配合量も、使用性、使用感、及び剤型により異なり、特に制限されないが、全組成物中、固型分濃度として０．１～３０％が好ましく、１～２０％がより好ましい。これら成分の配合量が上記範囲であれば、使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌を演出するといった化粧効果、使用性、使用感の点でより良好なものが得られる。

【００１９】

本発明の油性化粧料には、上記成分以外に、本発明の目的を損なわない範囲内で、油性成分、粉体、香料、界面活性剤、酸化防止剤、防腐剤、薬剤、保湿剤、増粘剤、美容成分、水性成分などを各種の効果を付与するためにに適宜配合することができる。

【００２０】

上記成分のうち、油性成分は、様々な感触を演出したり、経時安定性を確保する目的で添加されるもので、本発明の油性化粧料に配合されうる成分（ｂ）以外の油性成分としては、例えば、流動パラフィン、スクワラン、ワセリン等の炭化水素類、オリーブ油、ヒマシ油、ホホバ油、ミンク油、マカデミアンナッツ油等の油脂類、ミツロウ、ゲイロウ等のロウ類、ジイソステアリン酸ポリグリセリル、ジオクタン酸ネオペンチルグリコール、コレステロール脂肪酸エステル等のエステル類、ステアリン酸、ラウリン酸、ミリスチン酸、ベヘニン酸、イソステアリン酸、オレイン酸、１２－ヒドロキシステアリン酸等の脂肪酸類、ステアリルアルコール、セチルアルコール、ラウリルアルコール、オレイルアルコール、イソステアリルアルコール、ベヘニルアルコール等の高級アルコール類、低重合度ジメチルポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン、デカメチルシクロペンタシロキサン、オクタメチルシクロテトラシロキサン、ポリエーテル変性ポリシロキサン、架橋型オルガノポリシロキサン、フッ素変性ポリシロキサン等のシリコーン類、パーフルオロデカン、パーフルオロオクタン、パーフルオロポリエーテル等のフッ素系油剤類、ラノリン、酢酸ラノリン、ラノリン脂肪酸イソプロピル、ラノリンアルコール等のラノリン誘導体、デキストリン脂肪酸エステル、蔗糖脂肪酸エステル、デンプン脂肪酸エステル、１２－ヒドロキシステアリン酸アルミニウム、ステアリン酸カルシウム等の油性ゲル化剤類等が挙げられる。

【００２１】

また、本発明の油性化粧料に配合される粉体は、経時安定性を確保する目的で使用されるものであり、本発明の油性化粧料に配合されうる成分（ａ）以外の粉体としては、その例としては、酸化チタン、酸化亜鉛、酸化セリウム、硫酸バリウム等の白色無機顔料、酸化鉄、カーボンブラック、酸化クロム、水酸化クロム、紺青、群青等の有色無機顔料、タルク、白雲母、金雲母、紅雲母、黒雲母、合成雲母、絹雲母（セリサイト）、合成セリサイト、カオリン、炭化珪素、ベントナイト、スメクタイト、酸化アルミニウム、酸化マグネシウム、酸化ジルコニウム、酸化アンチモン、珪ソウ土、ケイ酸アルミニウム、メタケイ

酸アルミニウムマグネシウム、ケイ酸カルシウム、ケイ酸バリウム、ケイ酸マグネシウム、炭酸カルシウム、炭酸マグネシウム、ヒドロキシアパタイト、窒化ホウ素等の白色体質粉体、二酸化チタン被覆雲母、二酸化チタン被覆オキシ塩化ビスマス、酸化鉄雲母チタン、紺青処理雲母チタン、カルミン処理雲母チタン、オキシ塩化ビスマス、魚鱗箔等の光輝性粉体、ポリアミド系樹脂、ポリエチレン系樹脂、ポリアクリル系樹脂、ポリエステル系樹脂、フッ素系樹脂、セルロース系樹脂、ポリスチレン系樹脂、スチレン－アクリル共重合樹脂等のコポリマー樹脂、ポリプロピレン系樹脂、シリコーン樹脂、ウレタン樹脂等の有機高分子樹脂粉体、ステアリン酸亜鉛、Ｎ－アシルリジン等の有機低分子性粉体、澱粉、シルク粉末、セルロース粉末等の天然有機粉体、赤色２０１号、赤色２０２号、赤色２０５号、赤色２２６号、赤色２２８号、橙色２０３号、橙色２０４号、青色４０４号、黄色４０１号等の有機顔料粉体、赤色３号、赤色１０４号、赤色１０６号、橙色２０５号、黄色４号、黄色５号、緑色３号、青色１号等のジルコニウム、バリウム又はアルミニウムレーキ等の有機顔料粉体あるいは更にアルミニウム粉、金粉、銀粉等の金属粉体、微粒子酸化チタン被覆雲母チタン、微粒子酸化亜鉛被覆雲母チタン、硫酸バリウム被覆雲母チタン、酸化チタン含有二酸化珪素、酸化亜鉛含有二酸化珪素等の複合粉体等が挙げられる。これら粉体はその１種又は２種以上を用いることができ、更に複合化したものを用いても良い。また、これらの粉体は、必要に応じて、フッ素系化合物、シリコーン系化合物、金属石鹸、レシチン、水素添加レシチン、コラーゲン、炭化水素、高級脂肪酸、高級アルコール、エステル、ワックス、ロウ、界面活性剤等の１種又は２種以上を用いて表面処理して使用しても良い。

【００２２】

さらに、界面活性剤は粉体の分散性向上の目的で用いられるものであり、その例としては、化粧品一般に用いられている界面活性剤であればよく、非イオン界面活性剤、アニオン性界面活性剤、カチオン性界面活性剤、両性界面活性剤等が挙げられる。

【００２３】

更にまた、水性成分は、モイスチャー効果を付与する目的で用いられるものであり、水及び水に可溶な成分であれば何れでもよく、水の他に、例えば、プロピレングリコール、１，３－ブチレングリコール、ジプロピレングリコール、ポリエチレングリコール等のグリコール類、グリセリン、ジグリセリン、ポリグリセリン等のグリセロール類、アロエベラ、ウイッチヘーゼル、ハマメリス、キュウリ、レモン、ラベンダー、ローズ等の植物抽出液が挙げられる。

【００２４】

また更に、酸化防止剤としては、例えばα－トコフェロール、アスコルビン酸等、美容成分としては、例えばビタミン類、消炎剤、生薬等、防腐剤としては、例えばパラキシ安息香酸エステル、フェノキシエタノール等が挙げられる。

【００２５】

かくして得られる本発明の油性化粧料は、種々の形状の油性化粧料とすることができ、例えば、口紅、マスカラ、アイシャドウ、アイカラー、アイライナー、ほほ紅、ファンデーション等として利用しうるものである。

【００２６】

【実施例】

以下に実施例および参考例をあげて本発明を更に説明する。なお、これらは本発明を何ら限定するものではない。

【００２７】

参　考　例　１

表面処理真珠光沢顔料の調製：

真珠光沢顔料の母材として、表１に示すＣガラスを用い、これから以下の方法に従ってガラスフレークを製造した。このガラスフレークに対し、ルチル型チタニアを加え、以下の方法によりガラスフレーク表面を被覆して真珠光沢顔料１～４を得た。

【００２８】

（１）ガラスフレークの調製
表１の組成のＣガラスを１２００℃で溶融し、円筒状にブロー延伸薄膜化して冷却固化することにより所定の厚さにした。これを粉砕分級して所定の厚さ、粒度及びアスペクト比を有する４種のガラスフレークを製造した。

【００２９】
Ｃガラスの組成：
【表１】

成分	配合量(質量%)
SiO_2	６５
Al_2O_3	４
CaO	１４
MgO	３
B_2O_3	５
Na_2O	８

【００３０】
（２）真珠光沢顔料の製造
上記（１）で得た各ガラスフレークを塩化白金酸を添加した四塩化チタン溶液中に懸濁させ、この懸濁液を加熱して１時間沸騰させて、ガラスフレーク表面にチタニア被覆を設けた。濾過水洗後乾燥させ、その後６００℃で３０分熱処理し、表２の物性の真珠光沢顔料を得た。

【００３１】
真珠光沢顔料の物性：
【表２】

	真珠光沢顔料			
	1	2	3	4
母材	Cガラス			
チタニア(質量%)	11	16	20	26
ガラスフレーク(質量%)	89	84	80	74
平均厚さ(μm)	2.3	1.3	1.3	0.7
平均粒径(μm)	300	80	80	25
アスペクト比	130	62	62	36
明度(L値)	95	94	93	92
拡散反射率	70	62	74	74
反射色	シルバー	ゴールド	レッド	ブルー

【００３２】
実施例１
マスカラ：
参考例１で得られた各原顔料を用い、表３に示す処方および下記の製造方法により、本発明品１～４および比較品１～３のマスカラを調製した。得られたマスカラについて、以下に示す評価方法により、使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌を演出するという「イ．化粧効果」、及びその「ロ．化粧効果の持続性」、塗布時の「ハ．化粧のしやすさ（使用性、及び使用感）」及び「ニ．仕上がり膜の均一性」の４項目について下記の方法により官能評価を行った。その結果を表４に示した。
【００３３】
（マスカラの処方）
【表３】

成分（単位：質量%）		本発明品				比較品		
		1	2	3	4	1	2	3
1	ロジン酸ペンタエリスリット	15	0.1	30	—	—	20	20
2	ポリイソブチレン	—	—	—	20	—	—	—
3	パルミチン酸デキストリン	1	1	1	1	1	1	1
4	カルナウバワックス	5	10	5	5	10	5	5
5	有機変性ベントナイト	2	2	2	2	2	2	2
6	軽質流動イソパラフィン	60	39.9	54.9	45	60	45	45
7	無水ケイ酸	2	2	2	2	2	2	2
8	黒酸化鉄	5	5	5	5	5	5	5
9	真珠光沢顔料１＊	10	40	0.1	20	20	—	—
10	雲母チタン	—	—	—	—	—	20	—
11	ﾎﾟﾘｴﾁﾚﾝﾃﾚﾌﾀﾚｰﾄ・ｱﾙﾐﾆｳﾑ･ｲﾝﾎﾟｷｼﾞ積層末	—	—	—	—	—	—	20

＊：参考例１で製造したもの

【００３４】
（製造方法）
Ａ．　成分（１）～（４）を加熱溶解し、成分（５）～（１１）を加え、均一に混合する。
Ｂ．　「Ａ．」を容器に充填して、本発明品１～４および比較品１～３のマスカラを得た。

【００３５】
（評価方法）
各項目のうち、「ロ．化粧効果の持続性」、塗布時の「ハ．化粧のしやすさ（使用性、及び使用感）」及び「ニ．仕上がり膜の均一性」の３項目については、各試料について１０名の官能パネルにより、下記の＜７段階絶対評価基準＞にて評価し評点を付け、各試料ご

とにパネル全員の評点合計から、その平均値を算出し、下記の＜４段階評価基準＞を用いて評価した。また、「イ．化粧効果」については別に示す「イ．化粧効果」の評価により判定した。

【００３６】

＜７段階絶対評価基準＞

評　点	：	評　価
6	：	非常に良い
5	：	良い
4	：	やや良い
3	：	普通
2	：	やや悪い
1	：	悪い
0	：	非常に悪い

【００３７】

＜４段階評価基準＞

基　準		評　点（評　価）
平均値が５点を超える	：	◎（非常に良好）
平均値が３点を超えて５点以下	：	○（良好）
平均値が１点を超えて３点以下	：	△（やや不良）
平均値が１点以下	：	×（不良）

【００３８】

（「イ．化粧効果」の評価）

評　価	：	内　容
◎	：	従来に無い輝きを非常に有している
○	：	従来に無い輝きを有している
△	：	従来の輝きのレベルである

【００３９】

（評価結果）

【表４】

評価項目		本発明品				比較品		
		1	2	3	4	1	2	3
イ	化粧効果	◎	◎	○	◎	○	△	○
ロ	化粧効果の持続性	◎	○	◎	◎	×	○	△
ハ	化粧のしやすさ	◎	○	○	◎	○	△	×
ニ	仕上り膜の均一性	◎	○	◎	◎	○	○	×

【００４０】

表４の結果から明らかなように、本発明品１～４のマスカラは使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌を演出するといった化粧効果及び化粧効果の持続に優れ、使用性、使用感も良く、化粧膜の均一性にも優れるものであった。これに対して、油溶性樹脂成分を配合しない比較品１では、化粧効果の持続の点で、満足の行くものが得られなかった。また、雲母チタンを配合した比較品２では化粧効果の点で、ポリエチレンテレフタレート・アルミニウム・エポキシ積層末を配合した比較品３では化粧のしやすさ及び仕上り膜の均一性の点で満足のいくものが得られなかった。

【００４１】

実施例２

アイシャドウ：

以下に示す処方および製造方法でアイシャドウを製造した。

【００４２】

（処方）

成　分	質量%
１．トリメチルシロキシケイ酸	１０
２．カルナウバワックス	５
３．デカメチルシクロペンタシロキサン	１３．４
４．ジメチルポリシロキサン	２０
５．真珠光沢顔料２＊	５０
６．シリル化処理無水ケイ酸	１
７．香料	０．１
８．防腐剤	０．５

＊：参考例１で得たもの

【００４３】

（製造方法）

Ａ．　成分（１）～（４）を加熱溶解し、成分（５）～（８）を加え均一に混合する。

Ｂ．　「Ａ．」を容器に充填して、アイシャドウを得た。

【００４４】

得られたアイシャドウは、使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌を作り出すことができるといった化粧効果に優れたものであり、使用性、使用感も良く、化粧膜の均一性に優れたものであった。

【００４５】

実施例３

口紅：

以下に示す処方および製造方法により口紅を製造した。

【００４６】

（処方）

成分	質量%
１．ロジン酸ペンタエリスリット	１０
２．トリメチルシロキシケイ酸	１
３．ポリエチレンワックス	１０
４．セレシンワックス	１０
５．トリオクタン酸グリセリル	２１．４
６．ポリブテン	２０
７．赤色２０２号	５
８．黄色４号	２
９．真珠光沢顔料３＊	２０
１０．香料	０．１
１１．防腐剤	０．５

＊：参考例１で得たもの

【００４７】

（製造方法）

Ａ．　成分（１）～（６）を加熱溶解し、成分（７）～（１１）を加え均一に混合する。

Ｂ．　「Ａ．」を容器に充填して、口紅を得た。

【００４８】

得られた口紅は、使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌を作り出すことができるといった化粧効果に優れ、使用性、使用感も良く、化粧膜の均一性に優れたものであった。

【００４９】

実施例４

ファンデーション：

以下に示す処方および製造方法によりファンデーションを製造した。

【００５０】

（処方）

成分	質量%
１．トリメチルシロキシケイ酸	１０
２．カルナウバワックス	５
３．マイクロクリスタリンワックス	１０
４．デカメチルシクロペンタシロキサン	２０
５．流動パラフィン	２１．４
６．モノオレイン酸ポリオキシエチレンソルビタン	１
７．ベンガラ	２
８．黄酸化鉄	３
９．黒酸化鉄	１
１０．酸化チタン	５
１１．真珠光沢顔料４＊	１
１２．タルク	２０
１３．香料	０．１
１４．防腐剤	０．５

＊：参考例１で得たもの

【００５１】
（製造方法）
Ａ．　成分（１）～（６）を加熱溶解し、成分（７）～（１４）を加え均一に混合する。
Ｂ．「Ａ．」を容器に充填して、ファンデーションを得た。
【００５２】
得られたファンデーションは、使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌を作り出すことができるといった化粧効果に優れ、使用性、使用感も良く、化粧膜の均一性に優れたものであった。
【００５３】
実施例５
アイライナー：
以下に示す処方および製造方法によりアイライナーを製造した。
【００５４】
（処方）

成分	質量%
１．ポリイソブチレン	３０
２．セレシンワックス	５
３．軽質流動イソパラフィン	４３．４
４．チタン・酸化チタン焼結物	１０
５．真珠光沢顔料１＊	５
６．真珠光沢顔料２＊	１
７．無水ケイ酸	５
８．香料	０．１
９．防腐剤	０．５

＊：いずれも参考例１で得たもの

【００５５】

（製造方法）

Ａ．　成分（１）～（３）を加熱溶解し、成分（４）～（９）を加え均一に混合する。

Ｂ．　「Ａ．」を容器に充填して、アイライナーを得た。

【００５６】

得られたアイライナーは、使用部位の質感を変化させ、魅力的な容貌を作り出すことができるといった化粧効果に優れ、使用性、使用感も良く、化粧膜の均一性に優れたものであった。

【００５７】

【発明の効果】

本発明の油性化粧料は、使用部位にアクセントを与え、使用部位を際立たせるといった化粧効果、及び化粧効果の持続（にじみ防止効果）に優れ、使用性、使用感も良く、化粧膜の均一性にも優れたものであり、口紅、マスカラ、アイシャドウ、アイカラー、アイライナー、ファンデーション等として有利に利用しうるものである。

以　上

フロントページの続き

(51)Int.Cl.[7]　　ＦＩ
　　Ａ６１Ｋ　7/032

審査官　福井　美穂

(56)参考文献　特開２０００－０６３２３９（ＪＰ，Ａ）
特開２０００－０３８３１３（ＪＰ，Ａ）
特開昭６０－２５５７１３（ＪＰ，Ａ）
特開平１１－１３０９７８（ＪＰ，Ａ）
特開平０９－０７１４１７（ＪＰ，Ａ）
特開平０７－１９６４４９（ＪＰ，Ａ）
特開平０６－１１６５０８（ＪＰ，Ａ）
特開平０６－１１６５０７（ＪＰ，Ａ）
特開平０１－２６１３１９（ＪＰ，Ａ）
特開平０１－２３０５１１（ＪＰ，Ａ）
特表２００２－５０９５６１（ＪＰ，Ａ）
国際公開第９７／０４６６２４（WO，Ａ１）

(58)調査した分野(Int.Cl.[7]，ＤＢ名)
A61K　7/00ー7/50